

# 教育研究創発国際研修における学術活動報告書

令和 5 年 3 月 5 日

氏名 佐宗 駿

所属 教育心理学 コース

指導教員名 宇佐美 慧

## 1. 研究課題

テストの結果を日々の学習方略の改善に活かすには？—認知診断モデルによる理解の深さの定量的評価と実践への展開—

2. 報告する学術活動の実施期間 令和 5 年 3 月 2 日 ~ 令和 5 年 3 月 3 日

3. 日本学術振興会特別研究員 (DC) の現在の採用状況 DC1 DC2 採用無し

## 4. 学術活動

- 国外 国内
- ①英語論文公表
- ②研究科教員の研究プロジェクト参加
- ③フィールドワーク
- ④国際会議 (研究発表 運営補助 出席のみ)
- ⑤研究会 (研究発表 運営補助 出席のみ)
- ⑥研究指導委託
- ⑦留学
- ⑧国際研修
- ⑨国際インターンシップ
- ⑩その他 (具体的に: )

## 5. 学術活動実施の概要

※上記4で選択した学術活動について具体的に記載してください。括弧内の概要を必ず記載してください。

- ① 英語論文公表  
(著者、発表論文名、掲載誌名等、発表年月巻号、発表年月日等、論文内容の概要)
- ② 研究科教員の研究プロジェクト参加  
(プロジェクト名、代表研究者名、自身の具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、プロジェクトの概要)
- ③ フィールドワーク  
(調査先機関等、国名・都市名、具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、調査先の概要)
- ④ 国際会議  
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、学会・会議名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑤ 研究会  
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、研究会名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑥ 研究指導委託  
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究、研究テーマと受入教員、受入期間(年月日)、具体的な研究活動、研究発表内容等の概要)
- ⑦ 留学  
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究科、受入期間(年月日)、具体的な履修状況、研究発表内容等の概要)
- ⑧ 国際研修  
(プログラム名、派遣先機関、国・都市名、派遣期間(年月日)、プログラム概要、研究発表内容等の概要)
- ⑨ 国際インターンシップ  
(プログラム名、派遣先機関、配属部署、国・都市名、派遣期間(年月日)、具体的な活動、プログラム内容等の概要)
- ⑩ その他(具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度等の概要)

学術活動区分 (①～⑩を記入)	④
<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究発表</li> <li>・会議名：Future of Information and Communication Conference (FICC) 2023</li> <li>・国・都市名：San Francisco, CA, USA (Virtual での実施)</li> <li>・発表題目：Development of Assessment Tools for Depth of Understanding Quantitatively with Cognitive Diagnostic Models</li> <li>・発表形式：ポスター</li> <li>・発表予定年月日：2023年3月3日</li> </ul> <p>発表内容の概要</p> <p>近年の教育現場において、学習者の深い理解の涵養が重要な教育目標となっている。そのため、教師は学習者の理解状況を定量的に診断し、理解のどの要素につまずきを抱えているのかを把握することが望まれる。しかし、こうした学習者の理解の要素や深さをどのように定量的に診断するかについて、これまで十分に検討されてこなかった。そこで、本研究では、認知診断モデルという教育測定モデルを活用して、理解の要素と深さの定量的な診断方法を提案する。本研究は、(1)数学の診断テストの開発と実施、(2)認知診断モデルによる解析、(3)学習者と教師に向けた解析結果に関するフィードバックシートの開発、という3つのパートから構成される。本研究で提案する診断方法は、今後、デジタルツールを用いた活用も十分期待されるものである。</p>	

- (注) ① 年月日は西暦で記入してください。  
 ② 英語論文発表については報告する学術活動において発表又は受理されたもの。  
 ③ 上記に記載しきれない場合は、ページを追加しても差し支えありません。  
 ④ 複数回の学術研究活動による報告の場合、適宜本ページを追加し、2つ目以降についても必要な内容を網羅してください。

## 6. 学術活動による成果

※報告する学術活動について、教育分野における国際的リーダー人材の育成とその研究成果を海外に発信することを目的とした教育研究開発国際研修の趣旨に照らし、その成果を具体的に記載してください。学術活動により得られた自身の研究課題につながる成果についてもわかるように記載してください。

※本欄に書ききれない場合、ページを追加しても差し支えありません。

本学会は、情報通信分野に関する国際学会であり、世界各国の学術界および産業界における研究者が参加し、議論を行う場となっている。本学会は、複数のトピックを含んでおり、そのうち「e-Learning : Educational System Design」における発表を実施した。

申請者はこれまで、教育測定モデルとその実践的活用を中心に研究を進めてきた。本学会では、公立中学校で実践した学習者の学習内容の理解の深さを認知診断モデルという教育測定モデルによって、定量的に評価する方法の提案について発表を行ってきた。

本学会は、当初ハイブリッド形式での開催が予定されていたが、オンライン開催に変更となった。したがって、発表は事前に録画した発表動画を配信し、学会のスケジュールで組まれた発表時間において、チャットボックスを通して質疑応答を行うという形式になった。そのため、計画当初に予定していた他分野の研究者とのコミュニケーションを十分に行えたとはいえないものの、ポスター発表の原稿の査読過程および当日のチャットボックスでのやり取りを通して、刺激を得ることができた。

学会参加において、特に印象に残ったことは、異分野の研究者への自身の研究の伝え方の難しさの痛感である。申請者はこれまで、教育心理学分野に関する学会での発表を中心に行ってきた。しかし、今回参加した学会は、情報通信分野というこれまで経験してきた学会とは異なる分野において発表であった。そのため、参加者の前提とする知識が申請者自身のそれとは異なり、また査読内容や質問内容も、教授学習の観点からの質問というよりも、認知診断モデルがどのようなモデルであるのかという数理的な詳細に関する内容が中心であった。

以上から、学会の参加者の主要な研究分野や関心がどのようなものであるのかといった下調べの重要性を感じた。この経験は、今後の申請者の研究活動において、自身の研究の位置付けを多面的に捉えるだけでなく、自身も研究のどの部分が伝わりにくい箇所であるのかを再認識する契機にもなった。